

巻頭言

国際教育センター長 五味政信

昨年 2 月、留学生センター（1996 年 5 月設置）が国際教育センターに改組拡充されてから、この 7 月で 3 semester が経過したことになる。留学生センター時代の 14 年間は、本学が受け入れた留学生を教育・指導するという業務が中心であったが、新センターには新たな業務と使命（留学生と日本人学生両者の国際教育に携わり、大学の国際化に貢献する）が課せられた。これは大学全体の国際化推進に一層直結した活動への拡大であり、センターにとっての新たな地平を切り拓く転機となっている。具体的な新業務としては、①本学学生の海外派遣推進に関わる業務、②英語による社会科学関連分野の科目と日本語教育科目を中心に構成されている Hitotsubashi University Global Education Program (HGP) の中核となる「国際交流科目」群の企画運営業務の 2 つである。ここでは新センターが上記 2 つの業務を遂行する活動のなかで浮かび上がってきた幾つかの課題について述べることにする。

一橋大学は 2010 年 9 月に創立 135 周年を迎え、また、同年 12 月には新しい大学執行部体制がスタートした。山内進 新学長は学長就任に当たり、創立 135 年目の一橋大学が目指すべき大学像を「プラン 135」と名付けて公表したが、そのなかで大学の国際化推進については、前執行部の方針を継承・発展させ、次のように述べている。

「学部・大学院を通じて学生の国際交流を推進し、教育のグローバル化を進めます。将来的には全学部生が在学中に一度は海外で学ぶようになることを目指しますが、中期計画では、学部・大学院において、海外語学研修など短期のものも含めて、交流協定校を中心に毎年 300 人程度の学生の派遣と受け入れが明記されています。

質の高い教育を実践し、年間 300 人程度の学生の交流を実現するには、①学部・大学院における正規留学生の数を増やし、②交流協定校を整備し、③派遣と受け入れのための奨学金制度を充実し、④英語による授業を拡大、推進し、⑤日本人と留学生の混住型学生寮などの整備や事務体制の充実など環境整備に力を入れることが必要です。

国際交流が進むことで、一橋大学はグローバルキャンパス化します。また、海外留学によって、日本人学生はさまざまな体験を積んで、語学力、判断力、問題解決力そして生存のための強靭さを身につけます。さらに、芸術活動を含む文化への関心も高まります。スマートで強靭な一橋生を育てるうえで海外留学は重要な役割を果たします。一橋大学は国際交流をいっそう積極的に推進します。」

以上のような基本方針のもとで、センターは本学学生の海外派遣に関わる業務として、これまでの短期海外研修プログラム（豪州 Monash 大学への 4 週間研修、北京大学への 4 週間研修、スペイン Bergé 社での 5 週間企業研修、韓国西江大学への 3 週間研修、夏季休暇中の国際ボランティア実習）に加え、海外の交流協定校におけるサマープログラム参加

推進へも活動の範囲を広げ、多くの学生が海外留学を経験できる環境整備に努めている。本学学生への異文化、多様性理解のための活動を展開していくためには、それらの活動を担う体制の整備が課題であり、また、新たな交流協定校の開拓・新プログラムの提供に当たっては、本学学生のニーズを一層的確に掴む必要があることが指摘されている。

新センター発足以前、一橋大学は受け入れる交換留学生について、「日本語能力試験 2 級合格レベル以上が望ましい」という語学要件を協定校に伝え、日本語能力が高く、日本語による講義やゼミに参加できる交換留学生のみを原則として受け入れてきた。HGP 開設後は、語学要件を「日本語能力試験 2 級、(N2) 合格レベル以上、或いは TOEFL PBT 550 以上、または iBT 79 以上、または IELTS 6.0 以上」とし、日本語或いは英語のいずれかができる学生を受け入れることに変更した。3 semester 目を迎え、この変更による交換留学生の数の増加と質の変化が明らかとなってきた。数の増加は受け入れ業務量の増加となり、国際教育センター、国際課（旧留学生課）とも早晚業務過多となることが懸念されており、そのキャパシティが限界を越えないようにするための施策を検討する必要性が認識されている。また、質の変化については、日本語を理解しない留学生が本学で学ぶこととなり、彼らが一橋での生活、勉学に十分に満足できるよう英語による授業の一層の充実や大学全体の施設や窓口での外国語による対応などを含め、態勢をさらに整えていくことも今後の課題の一つと認識されている。

本年 3 月の東日本大震災と福島原発事故は未曾有の被害をもたらし、私たちはその被害の甚大さ、悲惨さに言葉を失った。それから 4 か月を経た現在も、原発事故の終息も復旧復興への道筋も依然として見えず、日本は危機的な状況のなかにある。そんな中で、私たち日本人だけでなく、世界の人々が、被害に遭った方々が一日も早く震災前の日常を取り戻せるよう祈り、温かい励ましを送ってくれている。本学の留学生たちも様々な形で被災地支援の活動に参加しており、私たちを大いに勇気づけてくれている。大震災と原発事故の影響から留学生数の減少も心配されたが、新学期の始まりとともにほとんどの学生が大学に戻り、また、新規渡日の留学生も加わって大学は活気を取り戻しつつある。「プラン 135」に「一橋大学は国際交流をいっそう積極的に推進します」とあるとおり、一橋大学は世界中から若き知性を迎え、また、本学の優秀な学生を世界の大学に送り出し、大学の国際化を強力に推進しようとしている。その先頭に立って国際化に貢献するという、センターに課せられた使命は一層その重要性を増すことになるろう。

本年 4 月 1 日より、国際課の小林安可里氏が留学生・海外留学アドバイザーとして、センターの留学生・海外留学相談部門において日本人学生からの海外留学相談業務、留学生の就職活動サポート業務等を担当している。センターに新たに加えられた業務を遂行する態勢が徐々に整備され始めている。

2011 年 7 月